

「不登校」という現象についての一考察

菅 佐和子

On the Adolescent School Refusal

Sawako SUGA

ABSTRACT: Recently, adolescent school refusal (school phobia) has increased year by year. This phenomenon has become not only an educational problem but also a serious social problem in our country.

This paper inquires into causes and counter measures of this phenomenon drawing upon 20-years experience in psychotherapy.

This paper contains:

- (1) A review of psychological theories concerning this phenomenon.
- (2) A review of the personality traits, home life, school environment and social influences of the author's cases.
- (3) Consideration of countermeasures for this phenomenon.

Key words: Psychotherapy, School refusal, Adolescent

I はじめに

昭和30年代に注目を集め始めた児童・生徒の「不登校」(ここでは、病気や経済的事情などの明白な理由のあるものを除いた、いわゆる学校嫌いを指す)は、今や大きな社会問題となっている。文部省の調査によると、「学校ぎらい」により平成2年度一年間に50日以上欠席した小学生は、8,014人、中学生は40,223人にのぼっている。欠席日数が50日未満の、いわゆる「不登校予備群」を含めると、これらの数字は、特に中学生の場合、さらに大きくなると推察される。しかも、これらの数字は増加の一途を辿っており、容易に減少するとは思えないのが現状

である。

このような「不登校」(「登校拒否」)という現象に関して、文部省初等中学教育局の学校不適応対策調査研究者会議報告(1992)¹⁾は、次のように要約している。

「個々の登校拒否のケースについてその原因・背景を分析すると、学校、家庭、社会の様々な要因が複雑に絡み合っていることが多い」

「登校拒否問題は、学校や家庭、更には社会全体にも関わっている問題であり、登校拒否は特定の子どものみにしかみられない現象であるといった固定的な観念でとらえるのではなく、現代の子どもに対する新しい児童生徒観を基本として総合的な角度から問題を認識し、指導・援助していくことが必要と考えられる」

このような公的見解にも見られるように、最

近では「不登校」の児童・生徒に対する援助の方法が多角的に模索されるようになってきた。それらは、学校内での教師による取り組みや学外の心理・教育相談機関、医療機関における個人心理療法をはじめとして、家族療法、適応指導学級、フリースクール、キャンプ活動、親の会の活動、施設への収容等々、多岐に亘っている。しかし、それらの努力にもかかわらず、この「不登校」という現象を解消させることは甚だ困難であると言わざるを得ないのが現実である。

筆者は、約20年前から、個人心理療法（カウンセリングやプレイセラピー）の場で「不登校」の児童・生徒との面接を続けてきた。筆者は、勿論、「不登校」のみを対象として仕事をしてきたわけではなく、公的な教育相談機関において仕事をしたこともないので、数量的な検討ができるほどの人数に出会ったわけではない。しかし、この約20年間、「不登校」のケースの訪れが途切れたことがないのも事実である。それほど、「不登校」のケースは発生頻度が高いということであろうか。筆者は、それらの、きわめて個別的な面接体験を通して、「不登校」の若者たちの内的世界の一端に触れ、それを“針の穴”として、そこからわが国の学校教育の場を垣間見てきたと言えるであろう。

最近では、このような体験から得られた知見（彼らの内的世界をどう理解し、どうアプローチするか等）を、学校の先生方に伝え、話し合う機会も多くなった。それによって、同じ「不登校」という現象を、従来の視座とは丁度逆の視座から眺める機会を与えられたわけであり、新しい気づきを得ることにもなった。

「不登校」に関して、心理臨床家としての立場からの発言を求められることが多くなった現在、この問題に関する筆者なりの考えをまとめて記述してみたいと考えた次第である。本稿においては、「不登校」に関する従来の学説、情報などを踏まえながら、自験例を織り込みつつ、筆者なりの考察を述べたいと思う。

Ⅱ わが国における「不登校」に関する用語（名称）の変遷

前述のように、わが国において、「学校へ行きたい」と思っているのに、学校に対する不安や恐怖感が強く、どうしても登校できない」という、神経症的な不登校現象が注目を集め始めたのは、昭和30年代のことであった。当時は、そのような現象を表わす用語として「学校恐怖症」(school phobia) が用いられていた。

昭和40年代に入ると、「不登校」に関する研究は次第に増加し、「学校恐怖症」に代わって「登校拒否」(school refusal) という用語が広く用いられるようになった。それは、『「恐怖症」という精神病理学的イメージを避け、もっと一般的な不適応行動としてとらえ、関わってこういう風潮の表れ²⁾であり、「児童生徒が登校しない状態は単に学校に対する不安や恐怖という面だけでなく多面的に理解されなければならない」という考え方¹⁾に基づくものであったと見なされている。

昭和50年代の半ばになると、「登校拒否」と並んで「不登校」という用語が広く用いられるようになってきた。筆者自身も、自験例を見る限り、“別段、学校そのものを恐れているわけでもなく、登校を拒否しているわけでもないのに、どうしても登校できない”という感じのケースが多いため、とりあえず、最も抵抗の少ない「不登校」という用語を使用するに至っている。しかし、この用語は、「学校に登校しないという状態を記述することだけであり、『登校拒否』よりも『学校恐怖症』よりも、一層状態像ないし、行動像を記述するだけの用語である²⁾」ことも事実であり、概念規定としては甚だ曖昧で、問題の核心がつかめないことも確かである。

以上のように、3種の用語のいずれが最適であるかは論議を呼ぶところであるが、いたずらに字義にこだわるよりも、「その意味するものが、現在問題となっているところの何らかの要因により児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況であるとの共通した認識を持

つこと」¹⁾が大切なポイントであるといえよう。

筆者自身は、本稿においても、引用文などを除いては「不登校」という用語を用い続けたいと考える。

Ⅲ 「不登校」のタイプとその心理力動および成因

さて、文部省¹⁾では、この「不登校」を以下のような7つのタイプに分類している。原文には番号はついていないが、便宜上、番号をつけて以下に列記する。

- ①学校生活に起因する型
- ②あそび・非行型
- ③無気力型
- ④不安など情緒的混乱の型
- ⑤複合型
- ⑥意図的な拒否の型
- ⑦その他

この分類に当てはめると、筆者の自験例は④を中心に、そこに①の要因が加わって、結果として⑤に該当するケースが多かったように思う。筆者の心理臨床活動の場が主に医療機関であったため②③⑥はまず来談しないという傾向もあったかもしれない。

次に、「不登校」に含まれている「問題の状態像」を以下の「8つの臨床群」に分類する立場もある²⁾。

- (1) 精神病
- (2) 神経症的登校拒否
- (3) 境界例
- (4) 精神薄弱
- (5) 養護家庭・貧困など
- (6) 非行
- (7) いじめを受けての不登校
- (8) 学校教育無関心型（明るい不登校ないしはドロップアウト）

この分類に当てはめると、筆者の自験例は(2)が中心であり、(3)(1)に該当するものも、あ

る程度の割合で存在していた。その上、(4)(5)(7)の要因が加わっていたことも決してめずらしくはないが、前記と同様の理由で(6)(8)は殆んど来談しなかったといえよう。

さて、このようなタイプや状態像の分類を、外側から見た分類であるとするならば、それらの背後にひそんでいる内的な心理力動への理解はどのような形でなされてきたのであろうか。それは、「不登校」の成因を解明する鍵となる部分であり、従来、いくつかの学説が世に知られてきた。

初期の段階で有力であったのは、アメリカの精神分析的立場から提唱された母子の「分離不安説」である。これに関して山中³⁾は「1941年になってジョンソンらは、この種の不登校を示すものに文献上はじめて『学校恐怖症』という概念を用いてその本態は『第一に児童にみられる急性の不安、第二に母親にみられる不安の増大、さらに母—子間の初期依存関係の未解決が認められる』とした。この点に関しては後にアイゼンバーグが『母子分離不安』としてこの原因論を考究して本症研究の先鞭をつけた」と展望している。

筆者が「不登校」のケースを担当し始めた頃には、「学校恐怖症」と言えば「母子分離不安によるもの」との考えが一般的であった。確かに、小学校低学年児や幼稚園児に関してはこの学説は実によく当てはまっており、心理療法を進める上で有効な指標となるものであった。自験例を挙げてみたい。

〈事例1〉A男・小学2年生・男児

A男の母親は、旧家の出身で世間知らずの上、神経質で内向的な女性である。父親は典型的なエリート男性で、手広く事業を営み、郊外の自宅へ帰るのは月に1回程度という生活を続けてきた。母親の関心は、専らひとり息子のA男に向けられ、A男の一手一投足に干渉するような育児を行ってきた。母子はぴったりと密着しており、お互いに相手が傍にいないと不安になるような状態であった。A男は、戸外で近所の同年齢の子どもたちと遊ぶ体験も乏しいまま小学校に入学した（幼稚園は、一

度は入園したものの、すぐに身体症状を生じたのをきっかけに母親が退園させた)。入学後も、朝になると腹痛を訴え、そうすると心配した母親がすぐに学校を休ませて医者通いをするという傾向が目についた。担任の印象では、A 男自身はうまく誘導すれば学級に馴染みそうな可能性が感じられたが、母親のほうの不安が高く、それが A 男の足を引っ張っているのではないかということであった。父親は、多忙を理由に A 男のことは妻にまかせきりで、帰宅時に高価な玩具を土産として与えるだけで、深く関わろうとはしない様子であった。

この事例は、筆者にとって「分離不安説」でよく理解できる気のするものであった。しかし、同じ「不登校」でも、中学生や高校生のケースになると、「分離不安」のみが原因とは思えないものが多くなり、むしろ、「自己像」の傷つきを回避するため「場面から逃避」しているのではないかと感じられるものが多くなっていった。

このあたりの諸学説の動向について鏞²⁾は次のように要約している。

「代表的なものは、米国の研究にならって精神分析的な考えを基盤にした『分離不安説』と学校状況を重視した高木の『場の状況説』であった。私は自己概念や自己認知の面に焦点を合わせた考え（これを『自己理論』といったが）をもっていた」

ここで鏞が「不登校」の心理力動の特徴として挙げている項目をまとめると、次のようになる。

まず、家族の願望（理想像）が子どもへ投影され続け、子どもはそれに同一化して、自分もそうだと感じる。そして、子どもの中に誇大な自己イメージが形成されていく。その一方、自己客観化の能力は次第に増大するため、自己の現実能力への失望がひきおこされる。その結果、自己評価（自尊心）は著しく低下し、それに対して学校での学業や対人関係的な圧力が大きな葛藤となる。その結果、学校場面からの逃避が生じることになる。

筆者の自験例でも、この解決がよく当てはま

るケースは数多い。

〈事例2〉B子・高校2年生・女子

B子は、サラリーマン家庭のひとり娘である。父親は、中堅企業に勤務する気まじめな努力家であるが、学歴が地味なためか、あるレベル以上の昇進は望めそうにないとのことであった。母親は、専業主婦であるが、華やかなことの好きな、勝ち気な女性である。親族には、一流大学の出身者が多く、両親はB子に大きな期待をかけ、掌中の玉のように大切に育ててきた。B子は、あまり頑強な体質の持ち主ではなかったが、容姿が整っており、学業成績も優秀、申し分のない「良い子」であった。

理数科系の得意なB子を、両親は一流大学の理系学部に進学させたいと望んでいた。B子もその期待に応えようと一生懸命に頑張っていたが、高校に入学してからは少しずつ成績が下がりはじめたのである。従来から、B子の勉強方法は、教科書を完璧に覚えこむという形のもので、自分自身で考えたり探索したりするという形のものではなかった。その上、以前は好きだったはずの理数科系の科目内容に、あまり興味が感じられなくなったのである。数式や化学式を眺めていても、一向に気持ちが集中せず、これから先もこんな勉強ばかり続けなければならないのかと思うと、うんざりする思いに襲われるようになった。そんな状態で机に向かっていても、能率は上がらず、当然、成績は落ちて行った。

B子は、そんな自分があるがままに認めることはできなかった。優等生としてのプライドがあり、両親や教師の期待を裏切るのが辛く、級友からの評価が下がるのにも耐えられなかったのである。そのため、試験を受けることが苦痛になり、定期試験の前になると頭痛や嘔気などの身体症状が生じ、登校できなくなってしまった。B子は、母親にだけでも自分の苦しみを分かってもらいたいと願ったが、娘が自慢の種である母親は、B子の実情を直視することができず、もう一度優等生に戻らせようと叱咤激励をくり返すばかりであった。追い詰められたB子は、次第に身体症状が増悪し、登校できない日が多くなっていった。

「不登校」に関して、「内閉神経症」(seclusive neurosis) という新しい神経症のカテゴリーを提唱した山中³⁾は、不登校になる若者は「高い《自尊心》を持っているがその基盤は弱く、ふとしたことで《学校社会》という社会的場面における適応に失敗し、家の中に深く閉じこもってしまう」「男性例は（中略）むしろ心優しい

が、彼らはいわゆる《ゆとり》の中にあるのではなく、内心の緊張が強く、外に出ると周囲への配慮だけで疲労してしまうため、必然的に引きこもることとなるのである」「女性例は（中略）むしろ積極的に外界に関わろうとする姿勢を示すが、たいていは幾度もこれを試み失敗し傷つき結局深く内閉するという形態をとるものが多いようである」と指摘している。

山中のいう、“高い自尊心を持っているがその基盤が弱い”というあり方は、筆者の自験例においても実にしばしば観察されるところである。筆者は思う。喩えて言うならば、基盤のしっかりした高い自尊心の持ち主なら、着飾った人々ばかりのパーティの席へ自分だけがボロをまとして入って行くはめになっても、たじろぐことなく自然な態度で振る舞うことができるのではないかと。それに対して、基盤の弱い高い自尊心の持ち主は、そのような場へ自分だけがボロを着て入って行くことには到底耐えられないであろう。しかし、パーティを諦めることもできないのである。それほど自尊心の高くない人であれば、そもそも、そのようなパーティに自分が出ようとは思わないので、たとえボロを着ていてもそれほど葛藤の種にはならないかもしれない。このようなイメージを思い浮かべると、基盤の弱い高い自尊心の持ち主の抱える“むずかしさ”がよく伝わってくるように感じられる。

そして、どういう訳か、最近の若者にはこの、基盤の弱い高い自尊心の持ち主がきわめて多いのである。彼らは言う。

「たとえ登校していなくても、自分は〇〇校の生徒であるという立場を捨てられない。定時制や通信制に移るなんて耐えられない」

「アルバイトをするのでも、他人に頭を下げなければならないサービス業は嫌だ。自分がお客で行くのは好きだが」

「専門学校へ行くのなら、大きくて立派な建物で、テレビでCFを流しているような所でない……」

「将来は、皆から高く評価され、尊敬されるような仕事に就きたい。見上げられるのは好きだが、少しでも見下げられるような仕事は嫌だ。」

このような高い要求水準にこだわり続ける彼らが、現実の中に居場所を確保することがきわめて困難になってしまうのは当然であろう。“開き直って泥にまみれてみる”という気持ちにはなかなか耐えられず、そのようなことを強いられそうな場合は、予め回避されることになってしまう。

大学生のスチューデント・アパシーを典型とする「退却神経症」(withdrawal neurosis)という新しい神経症のカテゴリーを提唱した笠原⁴⁾は、その原型が中学生の登校拒否に求められると指摘している。彼は、本症者の性格特性を「几帳面でやや強迫的」「過敏さと内向性」「自己愛的傾向」であるとしている。本症の若者たちは「人に拒否されることへの過度の敏感さ」を備えているため「確実に温かく受け入れられるところをしか訪れることができない。ちょっとでも批判的なトゲのあるところを敏感に察知してさける」ことになるのである。しかしそれほど他者の態度に敏感であるにもかかわらず、彼らは本当に他者に関心があるのかというとうそうではない面が目につかざるを得ないのも事実である。「敏感そうにみえてほんとうは、人のことを意に介せぬこと、加えて自分が自分について抱くイメージが尊大である」という笠原の指摘には首肯すべきところが大きい。

笠原は、このような「退却神経症」は圧倒的に男子に多く、女子の事例は少ないと述べているが、筆者⁵⁾は、最近の思春期女子の不登校例のなかにも、このカテゴリーに当てはまるものが存在しており、しかも、それに対する心理的援助の効を上げることは、きわめて時間のかかるものであることを報告したことがある。その報告においては、女子中学生の2事例を取り上げたが、彼女らはいずれも、成績もスポーツもよく出来、明朗活発な「良い子」と見なされてきた少女であった。それだけに、彼女たちの自己イメージは“並々ならぬ”ものであり、現実との折り合いをつけるのがきわめて困難であったわけである。彼女らのひとりとは、家に閉じこもって何もせずに暮らしながら（強迫的、完全

主義的傾向の持ち主の常として、ほどほどに課題をこなすことはできず、学校にかかわる全てを投げ出すことで、ようやく休息しているのであるが)、その一方で「でも、本当の私は、やればものすごく出来るような気がする」「このような状態から、いつか一足跳びにパッと救い出されるような気がする」という万能感に彩られた自己イメージを抱き続けているように見うけられた。

以上のように、思春期の不登校事例における、「自己愛」「自尊心」の問題は、きわめて今日のテーマである。勿論、これらとは別に、より古典的な「自信の乏しさ」や「劣等感」が問題となっているケースも、決して減少したわけではない。自己意識が鋭化する年齢においては、これもまた無理からぬことと考えられる。

〈事例3〉C子・中学3年生・女子

C子は、一見、明るくてお茶目な女子中学生であるが、1年ぐらい前から、腹痛などを訴えて学校を休むようになり、担任からの働きかけがあるとしばらくは登校できるものの、長続きせずにまた休んでしまうということをくり返していた。

C子の家庭は、経済的に豊かではなく、何人かの弟妹もいたので、C子は両親にかまってもらう機会の乏しいまま、小学校に通っていた。その頃から、学業成績も遅れがちで、スポーツも苦手、容姿に関しても自信の乏しい子であったらしい。しかし、彼女は、それなりに明るい、三枚目風の少女として小学校時代はとりたてて問題なく過ごしていた。

ところが中学生になると、定期試験の成績がはつきり示され、順位づけられるようになったこともあり、C子はいつも情ない思いを味わうようになった。その上、容姿に対するこだわりも強くなり、級友と対等につきあうことにたじろぎを覚えるようになったのである。仲の良かった友達からも、次第に自分が軽視され、バカにされているように感じ始めたC子は、次第に学校の門をくぐるのが重荷になってしまったのである。

このC子のようなケースも、男女を問わず枚挙にいとまがないであろう。とにかく「自尊心」にせよ「劣等感」にせよ、自己意識が鋭化する思春期～青年期においては避けて通れぬ

内的な問題であることは確かである。内的な問題ではあるが、同時にそれは、他者というものが意識されてこそ問題になるものでもある。学校という場合は、若者にとって一日の大半の時間を費す場所であり、否応なく他者とこすれ合う場面である。若者にとって同年齢の他者とかかわることは、その人格発達上、きわめて重要な糧となるものであることは、周知の通りである。若者にとって、同年齢の他者とかかわることは、最大の喜びであり、時には最大の苦痛ともなる体験である。学校という集団場面でのこのかわりがありあまりにも苦痛となったとき、それを回避すべく不登校という現象が生じざるを得ないのかもしれない。そこで次に、この学校という場の持つ問題について考えてみたい。

Ⅳ 「舞台」としての学校、「楽屋」としての家庭

「不登校」のケースとのかかわりを続けてゆこうちに、筆者は、学校とは児童・生徒にとっての「舞台」であり、家庭とはそこへ出て行くための準備を整える「楽屋」であると感じるようになった。

若者たちは、毎日、「楽屋」から「舞台」へと梯子をのぼって行く。梯子をのぼるためには、それなりの体力や気力が必要であり、それなりのエネルギーを費すものである。そのための栄養や休養を充分に与えてくれ、ポンと肩を押してくれるのは「楽屋」の機能であろう。その「楽屋」が寒々としていたり、混乱していたり、あるいは、気がかりの種であったりすれば、なかなか「舞台」への梯子をのぼるエネルギーは湧いて来ないであろう。また逆に、あまりにもメリハリのきかない“居心地の良さ”に包みこまれて動き出す気の起きないような「楽屋」もあるわけである。「楽屋」には、各々それなりの事情もあろう。しかし、何はともあれ、そこから「舞台」への梯子がしっかりとかかっており、出番に備えて心身の体勢づくりができる場であることが望まれる。これは換言すれば、そこに母性原理と父性原理の両方が機能している場が

必要であるということになろう。家族への働きかけが必要なケースも当然のことながらきわめて多い。

「楽屋」で一通りの準備を整えて梯子をのぼった若者たちは、「舞台」に出て行くわけであるが、そこでどうしても「舞台」に居続けることができず、はじき出されてしまうケースが数多く存在する。「舞台」がもうすこし“ゆったりした”場であれば、彼らはそこにとどまることができよう。ところが、その「舞台」は彼らにとって針のムシロにも等しいものであることも稀ではない。その代表的なものが、昨今重大な関心事となっている「いじめ」の問題であろう。逃げ隠れする余地のない「舞台」の上で、共演者である仲間たちから寄ってたかっの「いじめ」の対象にされた若者のなかには、「楽屋」に逃げ帰ってそこに閉じこもるしかする術のない人々もいて当然であろう。「いじめ」に耐えて「舞台」に居続け、その挙句殺されてしまったり自ずから生命を絶つことになるぐらいなら、とりあえず「楽屋」に逃げ帰ったほうがずっと得策であると筆者は感じている。故に、自験例が「いじめ」にあっている場合は、生命の危険にさらされる前に“逃げる”ことを勧めている。強い精神力を持って耐えることも大切であるが、生命を喪ってしまっては取り返しがつかないからである。

この学校における「いじめ」問題に文部省が本格的に対処しはじめたのは昭和60年からであるが、最近では全体数の減少が言われる一方で、つい先日も「いじめ」による殺人が報道され、また「いじめ」を苦にしたと見られる自殺も後を絶たないのが現状である。この「いじめ」は「不登校」と異なり、必らず教師の目にとまるとは限らず、表面化しないまま時間が経過することもめずらしくないようである。

この「いじめ」という現象について鵜養⁶⁾は「昭和61年度版の青少年白書によれば、昭和60年の4～10月までに、いじめの発生した公立中学校は、全国の68.8%にのぼっている。その内容は、冷やかしのからかいがもっとも多く、つ

いで言葉での脅し、仲間はずれなど、直接の暴力などの物理的力によらないものが圧倒的である。それゆえに、いじめられた本人の精神的苦痛は堪えがたいものがあるが、周囲にアピールしにくく、理解されないままひとり苦しむ子どもが多くなる」と述べている。

筆者は一般の大学生・短大生を対象とした授業のなかでこの「いじめ」を取り上げ、教材ビデオや彼ら自身の体験をもとに考えさせ討論をさせるという試みをこの何年かに亘って続けてきた。それは、実際の中学校や高校に足を踏み入れたことのない筆者にとって「いじめ」の実態を知る上でも貴重な体験であった。それについての詳しい報告をする紙幅はないが、最近の「いじめ」とは、それこそ“上下左右いずれかへ少しでもはみ出した”生徒が標的になるらしいという印象であった。ほんの少しでも“異質”なものを感じさせる生徒が標的になると言ってもよいであろう。そもそも、それほどの根拠もないのに誰かが標的にされているのであるから、ちょっとした風向きの変化で、別の生徒が標的になることもあり得るという。誰かがいじめられている時には、素早くいじめる側に身を置き、まかり間違っても自分が次の標的にならないよう神経をすり減らしている生徒も稀ではないらしい。「いじめられるほうが問題なのだ」「いじめられないように自分で何とかすればよい」といった意見も“素直に”出て来る昨今である。自分の体験として「いじめた」というのは割合に平然と語られるが「いじめられた」というのは(個別のレポートにはよく出て来たが)皆の前では語り辛いものなのである。いじめられるということは、若者にとって「恥ずかしいこと」なのであろう。それに比べて、「多数でひとりをいじめることは理由の如何を問わず恥ずべきこと」という感性は育ちにくいように思われる。これは、重大な問題であろう。

鵜養⁶⁾は「こうした中で、子どもたちはひたすら身近な友達を刺激しないように気を遣い、はっきりした自己主張を避け、他人に合わせ、当たり障りのない人間関係を維持しようとして

生活している」と指摘している。これでは、学校という「舞台」は、楽しいどころか神経をすり減らすような苦痛に満ちた場になってしまうであろう。

このような「いじめ」が多発する背景には、物質的には恵まれているものの、それだけに多様な個性があるがままで存在しにくい学校状況、ひいては社会状況が厳然とひかえていることは、多くの人々が指摘している通りである。例えば笠原⁴⁾は「日本が第2次大戦後、工業化の道をえらび想像をこえた成功をおさめた背景には、工学系・理学系を中心とする高学歴化があり、今度はその工業社会が不可避免的に高学歴者を要求するという形で高学歴社会がつくり上げられた」「人々は学歴上の上昇志向を目指し、子供に高学歴こそ人生で『損をしないため』の最低要件であると説き、幼児時代から努力をうながす」「管理化という言葉がピッタリするような窮屈さが年々押し迫ってくる」と述べている。誰もが、意図するにせよ気づかないままにせよ、この構図のなかに組みこまれ、将来「損をしないため」に子どもを走らせ続けることになるのである。

筆者の自験例においても、いわゆる進学高校で完全に息切れをきたしているケースの母親との面接で、きわめて印象深い言葉を交したことがある。どうしても子どもの「舞台からの退場」を容認できない母親に、筆者は「高学歴が手に入らず、たとえ名もなく貧しくても、元気であれば、それなりに幸福に生きて行くこともできるのではないのでしょうか？」と、たまりかねて問いかけたのである。するとその母親は、即座にキッパリと「いいえ、そんな下積みの人生なら、死んだほうがましです」と言い切ったのである。それは有無を言わせぬほど断定的な響きを持つ言葉であった。また別の母親は「世の中には、学歴とは関係なくプロスポーツや芸能界や商売で成功している人もいます。でも、それは一握りの特別な才能に恵まれた人です。そんな才能のありそうでないうちの子は、やっぱりサラリーマンになるしかないのです。給料の良

い大会社に入れるかどうかは、何と言っても学歴なんです。それが現実である以上、それに向かって努力するしかないではありませんか」と述べている。子どもを持つ大多数の親にとって、この言葉はきわめて共感されやすい言葉であろうと筆者は感じている。子どもが“挫折”せずにこの路線を走り続けている限り、方向転換を考える親はまずいないと言っても過言ではあるまい。

問題は、子どもが“立ち停ってしまった”時のことである。「舞台」から下りたいと言い始めた時のことである。その理由は、自分らしい生き方を探したくなったのかもしれないし、そうではなく、“自尊心の傷つき”を回避したいがためかもしれないし、「いじめ」にあって耐えきれなくなったからかもしれない、単に学業に飽きてしまったからかもしれない。そのような子どもを、「楽屋」としての家庭はどう受けとめるのであろうか。「舞台」を下りて「楽屋」にこもったまま何年もの月日が経過することさえ稀ではない。「舞台」には居たたまれず、「楽屋」からも締め出されて、どこにも居場所のないケースもある。自ずから学校以外の「舞台」を見つけて出て行く若者もないわけではないが、多くはそれもしないままに「楽屋」のなかで“何となく”日を過ごすことになるのである。無理に「舞台」へ追いたてようとする家庭内暴力という爆発が生じることもあり、また逆に、一見何の葛藤もなさそうな表情でテレビやマンガに没頭していることもある。あるいは、「楽屋」のなかではそれなりにきちんとした日常生活を送っている場合もあるようである。

このような時期の若者の心の中をうかがい知ることがきわめて困難である。本人自身、自分の“内界”がはっきり理解できているわけではないのであろう。ただ、どうしても「舞台」への梯子をのぼる気にはなれないのである。あるいは、のぼりたくてもその気力やエネルギーが湧いて来ないのである。それでは、このような彼らに対して、周囲はどのようにかわりを持ってゆけばよいのであろうか。“正解”や“特

効薬”がないことを承知した上で、筆者なりに考えをまとめてみたい。

V 「不登校」に対する心理的アプローチについて

改めて言うまでもないが、筆者は「不登校」という現象について何らかの価値観に基づいて云々しようとは全く考えていない。本人が自ずから「不登校」という行動を主体的に選びとり、その状態に心から適応しているのであれば、そもそも心理療法の場を訪れることもないであろう。筆者が会おうのは、「不登校」という状態のなかで何はともあれ本人が「苦しんでいる」ケースばかりなのである。個人の内的な苦悩は、基本的には他者が肩代わりできないものであることは言うまでもない。しかし、本人がひとりで「苦しみすぎて」疲弊してしまったり、取り返しのつかない行動に走ったりしないためには、さまざまな形で周囲の支えが不可欠であろう。筆者らが行う心理療法は、そのような支えのひとつに相当するものである。

筆者は、約20年前から「不登校」の児童・生徒との面接を行ってきたが、「不登校」のケースを担当することは病理の重さ云々とはまた別の意味での「重荷感」を伴うものであった。それは、本人の内的な変化のみでなく、登校という形で“結果”を出さなければならない仕事であったからであろう。勿論、ちょっとした躓きで一時的に「不登校」になったものの、間もなくスムーズに再登校するようなケースもないわけではない。しかし、多くのケースにおいて再登校に至る道のりはきわめて長く、また険しく、特に、最近の思春期～青年期の事例では元の学級への再登校はきわめて困難であると言わざるを得ない。面接を通して本人との信頼関係が形成され、周囲の配慮も十分に備わっていてもなお、元の学級という「舞台」に戻るには高い“壁”が立ちはだかっているという印象が否定できないのである。

このような状況のなかで、筆者は次第に、元の学級への復帰を“至上目的”にすることより

も、その“壁”を迂回して、より先の段階での社会参加への道を探すことのほうが“現実的”であり“建設的”ではないかと考えるようになったのである。改めて考えてみれば、若者が成長してゆく過程として学校生活が存在するのであり、学校のために生きるわけではないことに気付いたわけである。ただ、学校のような場に全く参加せずに成人することには、現代社会においてはそれなりの“不利益”が伴うことも事実である。知識の習得や“学歴”が持てないということの他にも、同年輩の他者との交流が体験できないことはあまりに寂しいことであろう。そのあたりを勘案すれば、①現在の不登校状態を“何はともあれやむを得ぬこと”として、あるがままに受け容れる ②本人と“それなりに血の通った人間関係”を持つことのできる他者を登場させる ③その人間関係のなかで、本人の内的な変化（例えば、傷つき感、消耗感などが癒やされたり、混乱が収まったり、葛藤が解消したり、外界への関心が高まったり、活動意欲が出てきたり等々）が生じるのを待つ ④ある時期を見て、本人にとって抵抗の少ない小集団への参加等を促す ⑤外界での本人の試行錯誤を見守る

といった心理的援助のプログラムが、筆者自身にとっては最も適切なものと感じられるようになったのである。①②③の後で本人自ずからが次のステップを見出すケースもあるが、現実にはここから外界への一步を踏み出すのが相当にむずかしいケースがきわめて多いように思われる。例えば、高校生の場合、「中退をして就職すればよい」と言っても、職場適応が学校適応よりさらに困難なケースも稀ではないと見なせよう。純粹に学業のみが苦手であるが故の「不登校」であれば、学業から解放されて自分に適した仕事に就くことで万事うまくゆくかもしれない。しかし、最近とみに多くなった“きわめて自尊心の高い”“対人関係で傷つきやすい”タイプのケースにとっては、「学歴」を断念して実社会の荒波にもまれることは容易なことではないのである。彼らは、“起死回生”の道を

海外留学や華やかな芸能界などに求めようとすることも稀ではないが、一足跳びに“花を咲かせる”ことが困難なのはどこへ行っても同じであろう。そうかと言って、彼らの“自尊心”を急速に低めることは至難の業であり、また危険なことである。彼らは、それこそバブルのようにふくらんだそれによって辛うじて自分を支えているのかもしれないからである。広がりすぎた“自尊心”の羽根を上手に折りたたんでもらうためには、それなりの受け皿が必要であると考えられる。彼らが羽根を折りたたんで等身大の自分を認められるようになることは、同時に、対人関係への過敏さが和らぐことに他ならないと筆者は考えている。そうやってこそ、彼らは、集団のなかに自分なりの居場所を見つけることができるのではないであろうか。

以上のような考えに基づき、筆者は④の段階として、中学生には、学校内の保健室登校や相談室登校、学校外の適応指導学級、フリースクール、私塾など、本人が“何とか参加しやすい”場への参加を勧めることにしている。それらは、元の学級よりははるかに少人数であり、自由度も高く、荷の重くない場所であろう。しかし、そこへ参加できるためには、少なくとも3人以上の人間関係（三者関係）を持てることが必要である。自分と相手しかおらず、相手が自分に合わせてくれる二者関係しか持てない段階では、いくら“適切な”小集団へ導入してもまず定着できないと言ってよいであろう。そして、この三者関係は二者関係を十分に堪能してからしか持つことができないものと見なされる。もし小集団に導入してもそこに居られないケースであれば、もう一度②③の段階に戻って歩み直す必要があらう。強引に④の段階に引っ張ろうとしても、まず無理なのである。

このようなアプローチの傍で、筆者は中学校の卒業証書だけはもらっておくようにと助言している。これがないと次のステップに進むときに困るからである。この点に関しては、学校側の配慮が望まれるところである。

高校生の場合は、義務教育ではないので、「中

退」という形になりやすい。中退後の受け皿が必要となる。就職には踏み切れず、仮に踏み切ったとしても長続きがしないケースが稀ではないことは前述した。そこで、とりあえず“今、荷が重くない”道であって、将来的には“学歴”にもつながり得る道が好まれるのである。定時制高校は、毎日登校し集団に参加できるケースでないと無理である。大検は、集団参加の必要はないが、自分で勉強を重ねて“本番”に勝負を賭ける度胸のようなものが必要である。この両方が荷が重いというケースには通信制高校が適しているようである。通信制の場合、登校日がごく少ないので、たとえ対人関係が苦手でも何とか耐えられることが多い。しかも、社会人や年長者が多いので、同年齢集団の持つ競争感や緊張感が薄く、気が楽であるらしい。その上、定期試験はあるにせよ、レポートをきちんと提出しさえすれば“何とかなる”ため、安心感を抱きやすいようである。勿論、規則正しい学習の習慣が失われているケースでは、最初は家庭教師などの援助者をつけておくことが望まれる。この家庭教師という援助者をつけることは、思春期のケースではきわめて大切な配慮である。学習指導そのものよりも、対人関係を持つことの意義である。換言すれば、兄代理、姉代理であり、同一化の対象となるからである。筆者は、家庭教師として男の子には男子大学生、女の子には女子大学生を紹介することにして、その学生がある程度の共感性や熱意を示してくれる限り、この関係はきわめてうまくゆくことが多かった。“親しみを感じる”という面では、カウンセラーとしての筆者より、若い学生のほうがずっと好まれるようにさえ思う。家庭教師との関係はあくまで1対1であるため、二者関係しか持てないケースでも何とかなる点も、見落としてはならないだろう。家庭教師をやとうだけの経済的余裕のない家庭も多いので、筆者はこのような活動をしてくれるボランティアの学生を養成できればと願っている。

上記のように①～⑤のステップを挙げてきたが、これらは決して、マニュアル通りに進むも

のではない。実に長い時間がかかり、文字通り、一進一退の日々が続くことが稀ではない。そのような時には、筆者は“何とかしよう”という気持ちを捨て、当分は水に漂う“浮輪”のような存在になろうと試る。大海にひとりぼっちで投げ出された時、ひとつの“浮輪”でもないよりはずっとよい。不登校の若者がせめて溺れないようにこちらは“浮輪”に徹して時を待つしかないと感じるのである。あるいは、朝顔のツルがとりあえず巻きついて伸びるための“添え木”になろうと思う時もある。そして本人が自力で走り始めた時には、しばらくは“伴走者”でいて、やがて、さりげない“応援団”になりたいと思うのである。

本稿においては、④の段階に重点を置いて述べた。筆者の体験では、この段階のケアがその後の歩み出しをかなり左右すると感じてきたからである。それ以前の段階においては、やはり、山中³⁾が述べているように「学校からの閉じこもり、いわば《内閉》が、治療的意義をもって捉え直されるべき」であると感じている。いずれの場合にも小手先の工夫だけではどうにもならないことを常に念頭に置いておきたいと思っている。

河合⁷⁾も、「不登校」について、「人間にとって子どもが大人になるということは、なかなかのことである。毛虫が蝶になる中間に『さなぎ』になる必要があるように、人間にもある程度『こもり』時期が必要なのである」「自立に到る過程に、依存することが、しばしば大切となってくる。ひきこもり、包まれている体験を十分にしてくる。次に出立へと向かってゆけるのである」と述べている。これらの見解に示されている「不登校」の建設的意味を理解しておくことは、その状態にある若者たちとのかかわる上できわめて大切なことであると考えられる。そし

て、その上で、各自が自分なりのかかわり方を模索してゆくことが望まれよう。筆者も、自分なりの努力を積み重ねてゆきたいと願っている。

VI お わ り に

「不登校」という、最近とみに増加している現象について、わが国における研究の流れを踏まえつつ、筆者自身の自験例を通して得られた、自分なりの考えを述べてみた。

現在の学校や家庭という環境のなかで不適応をきたしている若者に対する心理的援助の方法を探るという意味では、前号の拙稿⁸⁾に続く報告である。

文 献

- 1) 文部省初等中等教育局：登校拒否（不登校）問題について。1992: 1-50
- 2) 鎌幹八郎：登校拒否と不登校—神経症の発現から境界例および登校無関心型へ—。児童青年精神医学とその近接領域 1989; 30: 60-64
- 3) 山中康裕：思春期内閉 Juvenile Seclusion—治療実践よりみた内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理—。中井久夫・山中康裕編：思春期の精神病理と治療。東京：岩崎学術出版、1978: 17-62
- 4) 笠原 嘉：退却神経症。東京：講談社、1988: 193-218
- 5) 菅佐和子：女子中学生の不登校についての一考察—「退却神経症」という観点から—。愛知女子短期大学研究紀要 1990; 23: 31-39
- 6) 鵜養美昭：中学校における適応障害。臨床心理学大系; 10, 東京：金子書房、1992: 33-34
- 7) 河合隼雄：子どもと学校。東京：岩波書店、1992: 132-154
- 8) 菅佐和子：学業不振を主訴とする小学生男児の遊戯療法過程—箱庭を中心に—。健康人間学（京大医短部紀要別冊）1992; 4: 1-12